

● 相馬 拓也 特定准教授
Takuya SOMA (Associate Professor)

専門領域： 人文地理学，生態人類学，動物生態学，農学国際協力
(Human Geography, Ecological Anthropology, Animal Ecology, International Agricultural Cooperation)
受入部局： 野生動物研究センター（Wildlife Research Center）
直前所属： 筑波大学 人文社会系（Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba）



中央ユーラシア山岳環境におけるヒトと動物
の環境適応戦略の学融合型実証研究

中央ユーラシアの山岳や草原で暮らす人々のあいだには、人間と動物の関係にまつわるさまざまな「掟」があります。とくに家畜を追う遊牧民の暮らしには、五畜（ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダ）を飼養する膨大な暮らしの知恵に加え、気象災害などに立ち向かう災害対処の伝統知が見いだされます。またかつては大型の猛禽イヌワシを手なずけて狩りを行う騎馬鷹狩猟や、野生動物（アイベックス、アルガリ、ガゼル、アルタイセツケイなど）の狩猟がその生活を支えました。その一方で、頂点捕食者のユキヒョウやオオカミは、遊牧民の家畜を救荒時の食資源として捕食することもあります。牧草地や動物資源を共有する中央ユーラシアの人類と動物が、どのような接触・調和・命のやりとりなどを繰り返して、過酷な環境に適応してきたのか？わたしの研究では、“いきもの”として生存してきた人類そして動物たちの適応戦略—いわば「底デカラ」—を、地理学・生態人類学・動物生態学などの学知融合のフィールドワークにより探求しています。

遊牧民の生きる知恵から人類の「底デカラ」を探る

草原の民を代表するモンゴル遊牧民は、わずかな実りも出し惜しむような乾燥した草原世界で、さまざまな知恵を使って生き抜いています。たとえば、冬季に極度の多雪・風害・冷温害などの複合した「ゾド」という気象災害が、草原では数年に一度発生します。この災害回避行動の一つに、「馬群が移動した場所に、人間も移動して宿営する」ことがあります。馬は草原状態の良好な牧草地を自らかぎ分けて移動することから、人間もその特性にあやかって移動する巧みな退避行動

Interdisciplinary
Research in Environmental Adaptability
of Human and Animals across the
Highland Range of Central Eurasia

There are various “rules” between humans and animals interactions among local people living in the mountains and grasslands of Central Eurasia. In particular, nomadic animal herders have accumulated the vast knowledge for how to live together the five livestock (sheep, goats, cows, horses, and camels) in their traditional livelihood. In addition, there is also traditional ecological knowledge, which is used for survival from climatic disaster “dzud”. In the past, wildlife hunting, such as horse riding eagle falconry by taming a large golden eagle, and hunting of herbivores, supported their lives. For sharing pastures and animal resources in their living spheres, what kind of contact, harmony, life exchange... have been made between humans and animals across Central Eurasia, in order to adapt to the harsh environment? In my research, I am exploring the environmental adaptation and unique strategies of humans and animals as a natural survivor, through the fieldwork based on disciplines of geography, ecological anthropology and animal ecology.

でもあります。また「遠くからシカやアイベックスなどの野生動物が来たら、その冬は暖くなる」と言われ、冷温を避けて動物が移動した場所が穏やかな冬になることを暗示しています。ゾドとは人間の生活だけに影響を及ぼす気象災害ではなく、ときに生物全体にとっての危機ともなり得るのです。先住民、狩猟採集民、遊牧民に見られるようなこうした生態学的伝統知（T.E.K.）の体系は、人々の行動を経験則によって導き、人類の生存能を高めたもうひとつの「科学の様式」でもあるのです。

イヌワシと鷲使いの結び付きから環境共生観を知る

イヌワシを手なずけて狩猟を行うカザフ人の鷲使い（イーグルハンター）は、メスのみを狩猟用に馴致します（図1）。メスの方が強い母性を持ち、幼鳥を育てることから狩猟に向いているとされているのです。この騎馬鷹狩猟では、冬の防寒具に必要な毛皮を目的に、キツネやウサギをターゲットに捕獲します。高度に訓練されたイヌワシは、オオカミを捕らえることもできたとされています。イヌワシは狩猟伴侶としてだけでなく、かつて「精神の不安定な人の頭を羽で覆うようにたたくと正気を取り戻す」とされたり、「子どものいない家庭でつなぎとめると子宝に恵まれる」とも信じられてきました。そして馴致されたイヌワシは、マスターと4～5年間を共にした後、自然へと還されます。山に戻ってつがいとなり、新しい世代をはぐくんでほしいというイーグルハンターの願いが込められているためです。そのため、イヌワシを決して死なせないようにしています。この「産地返還の掟」を守ること、イヌワシの繁殖や個体数の安定に貢献した可能性もあるのです。イヌワシは、カザフ民族のアイデンティティ構築の象徴でもあり、狩猟伴侶として以上に友としての精神的よりどころでもあるのです。

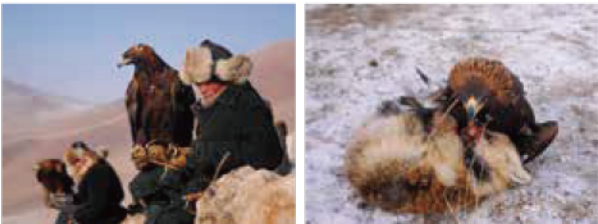


図1

ユキヒョウにみる畏れのオーラルヒストリーから調和を学ぶ

中央ユーラシアの山岳地では、もっとも希少な野生動物の一つがユキヒョウです（図2）。ユキヒョウは同地域12カ国にまたがり、個体数はおよそ4,000頭と推計されています。天山山脈やアルタイ山脈一帯ではかつて、その多くが毛皮目的に狩猟されました。このユキヒョウを仕留めたときに、モンゴル西部ウリヤンカイ遊牧民たちのあいだでは、葬送儀礼を執り行うことができました。この「ユキヒョウ送りの儀」（図3）は、ユキヒョ



図2

ウによる「たたり」「ハル・モルテイ」を封じ込めるための儀礼でした。そしてユキヒョウの肉は72種類の病気に効果をもつ万能薬としても食用されました。そして近年アルタイ山脈のユキヒョウと遊牧民のあいだでは、家畜襲撃とその報復的密猟が繰り返され、両者の間にはかつての畏怖が失われた緊張関係が横たわります。遊牧民がユキヒョウの生息地まで放牧地として利用するようになった反面、ユキヒョウ自身も家畜を「ごちそう」として認識し、危険を冒さずに獲物がとれる「家畜食堂」として遊牧民のかたわらに侵入してくることもあります。自らの変わりゆく生息環境や立場を利用しつつ、したたかに暮らすしなやかさがユキヒョウにもあるのです。

伝統的社会におけるフィールドワーカーの役割

動物は食用や資源として以外にも、人類の生存にも、精神文化の発展にも、なくてはならない存在です。その一例が、モンゴル南部ゴビ沙漠に暮らすラクダ遊牧民たちの風習に見ることができます。かつてラクダ飼いたちは、フタコブラクダのコブの間に板を渡して出産時の分娩台として利用したと言われています。そして季節移動の最中にあって、子どもたちはラクダの背負ったかごのなかで揺られ、さらにその背は故人を送る霊安台としても利用されました。まさに出生から死までのあらゆる局面に動物がたちあう中央ユーラシアの暮らしは、ヒトと動物の交渉研究に理想的なフィールドを提供してくれるのです。現地生活者たちの動物をめぐる重層的で奥行きのある知や眼差しは、動物学や生態学の研究だけでは発掘しがたい、知的体系のドキュメンテーションを意味します。「ヒトと動物の調和遺産」とも定義できる「いきもの」をめぐる伝統知を記録し、次の世代へ継承させてゆく積極的なコミットメントこそ、現代の地理学者／フィールドワーカーの役割でもあるのです。

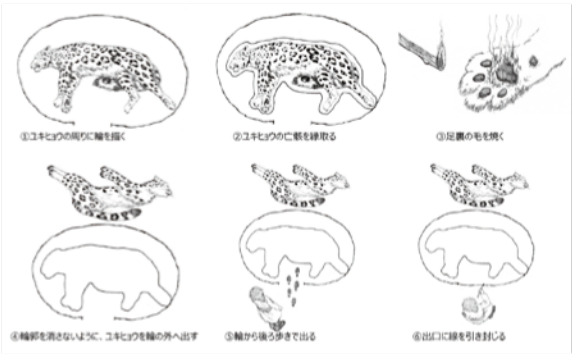


図3